

途上国現地を中心としたネットワーキングの可能性  
- 援助協調のなかで日本がより大きな役割を果たすために -

2004年4月25日  
在バングラデシュ日本大使館  
紀谷昌彦 (kiya@kiya.net)

1. なぜ途上国現地（フィールド）が大事なのか？

(1) 開発ニーズの把握・政策立案・実施

- 言葉に出来ない日々の雰囲気を感じる（情報の質）
- 行動のスピードと中長期的なコミットメントが勝負。

(2) 途上国現地における援助協調の進展

- 現地ドナー調整会合の重要性（物事が動き、決まる）
- 各種サブグループ/ネットワークの発生と拡大（最近はウェブサイトも）

2. 開発援助における現地機能強化に如何に取り組んできたのか？

(1) 経緯：立ち上がりの遅れ

- 日本：ODAの増加、人員の制約、マネジメント・スタイル
- 他のドナー：先進的な例あり（英、米、世銀等）

(2) 現状：現地 ODA タスクフォースの発足と進展

- バングラデシュ・モデルとは？ (<http://www.bd.emb-japan.go.jp/bdmodel/>)
- 現地 ODA タスクフォースの発足（同モデルも参考に）（昨年）
- 一部途上国現地でのリードと本省主導の推進の組合せ（今年3月のパリ会議）

(3) 課題：変革のマネジメント（情報・人・ツールとその根底にある政策）

- 情報：情報・知見の共有のため ICT を活用。
- 人：既存の人員を活用しつつ能力向上、目標設定と動機付け。
- ツール：各種 ODA スキームや委託調査を活用・改善。特にスキーム改善は急務。
- 政策：オールジャパンの「司令塔」に。問題は成果。

3. 現地機能強化のためにネットワーキングが如何に活用できるのか？

(1) 途上国現地を中核にしたネットワークこそ鍵。

- ICTの進展を背景に、仕事の進め方が質的に変化。
- 現地のみならず、あらゆる関係者（例えば出張者）を動員、恒常メンバーに。

(2) 途上国現地・本部・国際機関所在地の補完関係

- 本部はサポート・サービス機能を如何に拡充するか。
- 国際機関所在地とは、国別・課題別双方で連携。
- 国別・課題別のそれぞれのコアを作り、全体をゆるやかに束ねる形が理想。

(3) 途上国現地から直接日本国内の幅広い層へのアウトリーチ

- 政府、NGO、更にはごく普通の人と一緒に考えられるように（開発教育も）。

(4) 現地同士の相互ネットワーキング

- 情報・知見のみならず気概・情熱も共有。
- メールングリスト、メルマガ、ウェブサイトを通じて具体的行動を。

4. そして開発パートナーシップとの融合へ

(1) 途上国現地の「最前線」は特にセクター別の開発パートナーシップ

- 途上国現地のセクター・チームリーダーの能力強化が成果に直結。
- 大切な情報・知見を如何に外からタイムリーに流し込むかが大事。

(2) 課題別の「最前線」は各種国際会議・セミナー（世銀、DAC等）

- 理論重視、総論重視の議論に現場感覚を如何に反映させられるか。
- 大切な情報・知見を如何に途上国現地から流し込むかが大事。
- 逆に、情報収集も大事。

(3) 日本の知見・リソースを世界の知見・リソースとリンクする

- 日本と世界の垣根を超え、自立した個々人のゆるやかなネットワークに。
- 価値の創造は情報・知見のギャップの裁定(arbitrage)から。
- 結局は一人一人のリーダーシップが鍵。具体的行動と成果から普遍性を発信。

(以上)